

第 22 回作業科学セミナー 演題募集要項

第 22 回作業科学セミナーにおける演題を募集します。演題は、作業および作業的存在に焦点を当てたものであり、作業科学の研究推進、学問的發展に寄与するもので、未発表のものに限ります。皆様からご応募を心よりお待ちしております。

1. 発表形式

口述、ポスターのいずれかの発表形式を選んでご応募ください。

口述発表：15分（発表：10分，質疑応答：5分）

ポスター発表：フラッシュトークおよび指定時間内におけるポスター前での討論。

※時間の都合で、発表形式や発表時間の変更をお願いすることがあります。ご了承ください。

2. 演題募集期間

平成 30 年 6 月 18 日（月）～平成 30 年 8 月 31 日（金）23 時まで

※演題募集締め切りを延長しました。

3. 応募方法

- 演題は、演題募集専用メール osseminar22endai@jssso.jp で受付けます。
- 下記の必要事項を添付形式（Microsoft-Word 使用のみ受付可能）で送信してください。
- 投稿規定についての詳細は、日本作業科学研究投稿規程 をご参照下さい。
（日本作業科学研究投稿規程：<http://www.jssso.jp/literature.html>）
- 演題送付後、数日中に演題登録完了のメールをお送りします。メールが届かない場合は下記問合せ先までご連絡ください。

必要事項

- 1) 発表者氏名
- 2) 発表者所属
- 3) 連絡用メールアドレス
- 4) 発表形式（口述またはポスター）
- 5) 抄録原稿（抄録作成要領を読み、抄録原稿作成例を参考に作成してください）

4. 抄録作成要領

- 抄録原稿は、抄録原稿作成例 1 を参考に、日本語で A4 用紙 1 枚以内で作成してください。
- 英文抄録は採択が決まった方のみにご提出いただきます。まずは日本語のみご提出ください。
抄録原稿作成例 2 を参考に、英語で A4 用紙 1 枚以内で作成してください。
- 引用文献の表記の形式は、日本作業科学研究会投稿規程を参照してください。
（日本作業科学研究投稿規程：<http://www.jssso.jp/literature.html>）
- 研究対象者や著作権などに対する倫理的配慮を十分に行った上で応募してください。抄録の

本文には、倫理的に配慮した発表であることを明記してください。

- 発表演題に関連して、企業や営利団体などから金銭などの提供を受けた場合や受ける予定がある場合には申告する必要があります。発表時に利益相反の有無を述べてください。
- 抄録集作成の都合上、レイアウト等の変更を応募者をお願いする場合があります。

5. 英文抄録

採択決定の連絡後1週間程の期間で、演題名・演者名・所属および抄録内容の英文を付記していただきます。英文抄録ご提出の際は、提出前に英文校正を済ませてください。

6. 応募演題の審査および採否のお知らせ

応募演題の採否は、本セミナー実行委員会の審査を経て決定いたします。

採否の結果は、10月1日（予定）までにe-mailにて応募者にお知らせいたします。

7. 演題登録・抄録に関するお問い合わせ、抄録原稿送付先

第22回作業科学セミナー 実行委員会事務局

e-mail: osseminar22endai@jssso.jp（高木）

タイトル (MS 明朝 12 ポイント)

氏名, 所属 (MS 明朝 10.5 ポイント)

本文 (MS 明朝 10 あるいは 10.5 ポイント 1300~2000 字程度)

はじめに：回復期身体障害患者を対象とする作業療法は、充実した新生活構築を援助するため、身体機能、日常生活機能に特化して行われているが、退院後の社会参加は容易でないとの指摘がある（太田，2010）。一方、作業療法士の間では、集団作業療法の必要性は指摘されている（澤，2010）が、患者の参加経験は明らかにされていない。本研究で、作業とは作業療法場面の活動より広い範囲の人間が日常的に行う行為を意味する。

目的：回復期患者の社会参加を促進するためのペア参加型作業療法における患者の経験を理解する。

方法：ペア参加型作業療法とは、回復期リハビリテーション入院患者と担当作業療法士のペア（通常 10~15 組）がゲーム、調理、クラフト、買い物、園芸、合唱などの活動のひとつに参加する作業療法を指す。

研究方法：参加型作業療法における患者と作業療法士の経験を研究するために、参加観察、個別インタビュー、作業療法士のフォーカスグループを実施した。インタビューに応じた作業療法士は、18 名、患者は 21 名だった。インタビューで収集したデータをもとに逐語録を作成し、Mattingly (2000) を参考にナラティブ分析を用いて解釈した。今回の発表では、患者の経験の解釈から明らかになったことを発表する。本研究は所属機関の倫理審査で承認された。

結果と考察：

1. 実施と気づき：患者は障害を持って以来、日常生活でどのくらい自分ができるか実感できず、不安を持っている。ペア参加型作業療法に参加して、日常的な作業に実際に従事することを通して、自分が環境をコントロール（できる）程度に気づき、それによる喜び、安心、自信を持つ。
2. 他の患者との共有経験：回復期の患者は、孤立した気分で入院生活を送っていることが多い。ペア参加型作業療法で他の患者たちと一緒に作業に参加することを通して、自分と同じように障害によるライフクライシスにある人々と、共感、共有を持ち、喜びを感じ、将来への活力を実感していたことがわかった。共有経験は、前向きな姿勢へと発展し、将来へ橋渡しをする。著しい機能制限がある人も、作業参加を通して、社会的存在となり、他の患者との活発な作業参加を喜ぶことができる。
3. 作業療法士とのペア参加が患者に安心を保証し、障害発生以来経験していなかった作業に居心地良く挑戦することが可能になったと考えられる。

結論：

ペア参加型作業療法の中で障害発生以来経験していなかった作業に参加することが、患者に自分のコントロール程度を気づかせ、自分と同じように障害でライフクライシスにある人々と、共感、共有を持ち、喜びを感じ、将来への活力を実感することがわかった。このような達成を通して、ペア参加型作業療法は、社会参加への移行のための一つの社会参加前訓練として機能した。

文献：

Mattingly, C.& Garro,L.C.(2000). Narrative and the Cultural Construction of Illness and Healing. Berkley: University of California Press.

太田仁 (2010). 集団リハビリテーションの実際. 東京：三輪書店.

タイトル (Times New Roman 12 ポイント)

氏名, 所属 (Times New Roman 12 ポイント)

本文 (Times New Roman 11 ポイント 300~500 単語程度)

Introduction: Occupational therapy for clients in the recovery stage focuses on physical function and self care skills to promote clients' establishment of fulfilling new lives. After recovery rehabilitation, however, clients have trouble returning to society (Oota, 2010). Occupational therapists have stressed group therapy's positive effects for clients' returning to society (Sawa, 2010) but there is no investigation of clients' experience during group therapy sessions. In this presentation, occupation means human actions in daily life, in a wider range of "doing" rather than therapeutic activities.

Purpose: To understand the client's experience in client-and-therapist paired participation occupational therapy (PPOT) sessions.

Methods: PPOT were sessions in which 10-15 client-and-therapist pairs join in an activity such as playing a game, cooking, shopping, gardening, or singing. We conducted participate observation of PPOT, individual interviewing of clients and therapists, and focus groups of occupational therapists. 18 therapists and 21 clients participated in interviews. We analyzed the transcripts of interview data of clients and therapists using narrative analysis (Mattingly, 2000). This presentation shows a part of that research, the analysis of the experiences of the client participants. This research had IRB approval.

Results and discussion:

1. Practice and awareness: Since the onset of disability, clients were not sure of their ability to control everyday life and were anxious about their futures. Through the practice of daily occupations in PPOT sessions, they realized how much they could control environment even with their body disabled and this resulted in feelings of pleasure and/or safety and/or self confidence.

2. Sharing and empathy with other clients: Clients staying in the hospital during their recovery stage often felt lonely. Participating in activities in PPOT sessions with other clients, they experienced feelings of empathy and sharing with others also facing life crisis brought by disability as they were. Through participation in PPOT sessions, they enjoyed doing things together and realized energy toward their future. The clients' empathy and sharing brought them more positive attitudes and bridges to the future. Through participating in PPOT, clients with severe disabilities could be social beings (Steffan, 2009) and enjoy active participation in occupations with others.

3. Paired participation with their therapists guaranteed safety and security so that the clients could comfortably challenge themselves in occupations unexperienced since their disability onset.

Conclusion: Clients' participation in occupations not experienced since their disability onset promoted their awareness of their ability to control the environment, to have empathy and sharing with other client participants that brought them pleasure and resulted in realizing their energy toward the future. Through these gains the PPOT acted as a form of pre-training for transition to social participation.

Reference:

Mattingly, C. & Garro, L.C. (2000). Narrative and the Cultural Construction of Illness and Healing. Berkley: University of California Press.

Oota, H. (2010). Practice in group therapy. Tokyo: Miwashoten.